
湿疹 -ステロイドと赤い下着-

高橋熱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

湿疹 - ステロイドと赤い下着 -

【Nコード】

N9136U

【作者名】

高橋熱

【あらすじ】

失業してから暢気に「主夫」を続けるうだつのあがない男。
働き詰めで神経の参っている妻。

「いじめ」の恐怖から登園拒否に陥る娘。

ある夜、偶然覗き見をしてしまった隣人の性生活が、
眠れない夜のささやかな「慰め」に。

ある理由から引越すことになる隣人。

その日を境に、原因不明の「湿疹」が更に酷く妻の体を蝕んでいく

……。

出口の見えない、八方ふさがりな一家の話です。

妻を壊したのは俺だった。娘もたぶん壊れていた。この家でまともなのは、壁掛け式の電波時計と金魚くらいだった。

皆がおかしくなってしまったのは、俺が失業したあたりからだっ
た。いや、もつと言えば、妻と出会った頃から、我々はお互いを壊
し始めていたのかもしれない。

壊れた男女からは、壊れた子供しか生まれてこないのは当然だっ
た。世の中もおかしかった。皆おかしかった。ではいつ「まとも」
だったのかと問われると、正確に思い出すことはできないが、少な
くともちよつと前までは、今よりもずつとましなはずだった。

微妙に揺らぐ足取りは、連日の猛暑のせいばかりではなかった。
姿勢を保つための大切な梁が欠落していた。疑問符のように湾曲し
ている背骨のお陰で、丘陵に切り開かれたゴルフコースより、乾い
た蝶の羽を巢に運ぶ黒蟻の様子がよく見えた。

しかしそれは注意深く観察しているわけではなく、一方的に網膜
に反応しているだけだった。その証拠に、次の瞬間には蝶の羽も黒
蟻も、俺の使い古したランニングシューズの靴底に消えていた。

とにかく俺は一刻も早く自らに課せられた責務を全うし、冷たい
缶ビールを胃袋に流し込むことで頭は一杯だった。

園のドームが視界に入る頃には、前髪やもみあげからぼたぼたと
汗が流れ出ていた。昨夜の深酒がまだ抜け切れていないのだ。

自販機の売上勘定をしているババアの会釈を、俺は無視した。路

駐を警察に通報したのは間違いなくこいつなのだ。

幹線道路から二本も三本も隔たった静かな路地。到底、取り締まりを行うような場所ではない。煙草が三十分売れなかったからといって生活に困ることはないだろうに。人は皆、お互い我慢し合って生きているんだということをこれっぽっちも想像できないエゴイスティックな老醜。

日に焼けたアスファルトが、腐食した塩ビ板のように歪んで見えた。灼熱の太陽から放たれる光の針は容赦なく俺の頬を刺した。ハナの柔らかな温もりは湿った掌から小指の第一関節にまで移動し、わずかな衝撃さえあれば簡単に消えて無くなりそうだった。俺に託された責務の履行。

不意に足元を掬われ、道沿いの生垣にどすんと腰を打ちつけた。完璧に油断していた。ハナは驚くでもなく笑うでもなく、自分の親指をしゃぶりながら「なにしてるの？」とだけ言った。

俺はハナの無表情な顔を見ながら、しばらく立てずにいた。尻の下に固い植物の根が当たっていた。右足は宙に浮き、左足は側溝に転がるインスタントラーメンの容器を踏み潰していた。ババアの姿はもう販売機にはなかった。空はブルーハワイの原液を流し込んだような青さで地上を脅迫していた。

入社十年、ようやく一人前として認められつつあった会社が、ハナが産まれるのを待っていたかのように倒産した。それは、あまりにも突然の事故であり、結婚当初描いていた二人の人生設計は大きな変更を余儀なくされた。幸い、大手の広告会社で働く妻のお蔭で何とか家族三人が食べていける収入はあった。

時々、求人チラシに目を通すものの、子供を園に預けている時間帯だけ雇ってくれるような都合のいいところはどこにもなかった。かといってフルタイムで働くとなると、ハナを送り迎えすること

ができない。妻は今の幼稚園が気に入っていた。家計は厳しいが、ハナの面倒や家事を俺に任せられる今の状況も満更悪くはない、と彼女は判断した。ハナが大きくなるしばらくの間、妻は俺が家にいることを望んだ。俺は妻の言う通りにした。妻とはこれ以上、自分のことで争いを起こしたくはなかった。

「ねえ、はやくいこうよう」

ハナはいつまでもぼうつとしている俺のシャツの袖を引いた。俺は諦めて起き上がり、尻と掌についた土を払った。親指の先から少し血が流れていたが、それは倒れた時に切ったものなのか、ささくれが裂けているせいなのか分からなかった。

煉瓦造りの瀟洒な門をくぐると、ハナは俺の手を振り解き、教室の入り口に立ちはだかる「トトロの木」に向かって一目散に駆け出した。ドーム型の天井はまるで巨大なビニールハウスのように広い園庭を丸ごと包み込み、厳しい夏の紫外線を和らげていた。

園には俺よりずっと若い多くの母親達が我が子の手をひきながら歩いていた。ここに来る度、俺はなぜか人を殺めた指名手配犯のような後ろめたさを感じた。あるいは女装して外出をしているような気恥ずかしさを。

時々、俺と同じように送り迎えをする父親もいるが、彼らは大半がスーツか小綺麗なポロシャツを着ていた。その度にＴシャツにホットパンツなんていう格好じゃなく、もったきちんとした身なりをしてくれば良かったと後悔した。

「こばと幼稚園」の年少クラスにハナを入園させて三ヶ月、園のリズムにも大分慣れてきた。ハナは結婚して八年目にようやくできた子供だった。一人っ子は可愛そうだと思いつつも、妻が唯一の稼ぎ手である現在の状況では、精神的にも経済的にも二人目は難しかった。

「ハナちゃん、おはよう。また今日も可愛く結んでもらったのねえ」
担任の先生がハート型の髪飾りを指でぼんとはじきながら言った。
「あみこみだよ、せんせえ」

後ろを振り返り、ハナは頭を左右に振ってこれ見よがしに長い髪を見せた。

「編みこみのできるパパなんて、めったにいないよあ。いいなあ、ハナちゃん」

茶色の瞳を大きく見開いて、先生は俺を見上げた。俺は頬の髭を撫でながら努めて笑おうと試みた。自然に笑う、ということが根本的に苦手だった。

「誰だってできるんじゃないですか？　しょっちゅうやっていれば慣れますよ」

気の利いた言葉の一つも出てこない自分がいつもながら情けなかった。

「おはようございます、鳴海さん」

アパートの向かいに住む優介ママが俺の背中越しに言った。声を出さなくても彼女が側にいることは強烈な香水の匂いで分かった。彼女が現れると、毛筆の書簡を絵の具で塗り潰すように、園の雰囲気が一変した。

「優介君、おはよ。あれ、お風邪かな？」と言って、先生は仮面ライダーのイラスト入りマスクを指差した。

「咳と鼻水が今朝から酷くて。冷房病ですね、きっと」

優介ママは息子の運動靴を脱がすためにその場にしゃがみこんだ。レインボーカラーの短いニットスカートの裾が大きく上にめくれあがり、胸元の開いたカットソーから淡いピンクの紐が見えた。

「ハナちゃんはいいつも元気がいいね。そういえば、全然お休みしないですね？」

振り返った優介ママから俺は反射的に目を逸らし、先生に抱かれ

ているハナを見て、そうですね、とだけ答えた。ハナは美味しそうに親指の爪を食べていた。

「男の子は弱いです。病氣ばかりしてるって感じ。私もハナちゃんみたいな女の子が欲しいなあ」

彼女たちとチューニングが合うまでには、まだまだ時間がかかりそうだった。先生は十九、優介ママはおそらく二十代真ん中。彼女たちより二周り近くも違う自分の歳を、俺は改めて意識させられた。

お別れの寂しさも名残惜しさもないまま、ハナが教室に向けて駆け出すのを見届けると、「お預かりします」という先生の微笑を背に俺は帰路についた。娘の愛嬌のなさには呆れる。毎日服を着せ、髪を結い、送り迎えをし、飯まで食わしてやってるというのに。

先の転倒でその部分だけ葉が乱れている垣根を横目に、老醜の自販機で缶コーヒーを買った。悔しいが、缶コーヒー1本のためにコンビニまで歩く気力はなかった。ガムでコインの投入口を塞いでやるうかと一瞬でも考えた自分が惨めに思えた。

そして、まだ冷蔵の足りないブラックコーヒーのプルトップに指をかけた時、自分が飲みたかったのはコーヒーなんかじゃなくて、冷えたビールだったことに気がついた。

街道の櫓から聞こえる螺旋を巻くような蝉の鳴き声と、朝の題目を唱える某宗教信者の合唱は、暑さに対する感覚を一層鋭敏にさせた。

「鳴海さん、すいません、少しお時間あります？」

自転車のブレーキをかけながら、優介ママが椅子から降りて遠慮がちに言った。

「せっかくご近所に住んでいて同じクラスなのに、中々お話する機会ってないですね。ご迷惑じゃなければ家にきませんか？」

やるべきことはいくつもあったが、ジムに行くのを遅らせるか休めば良かった。それからビールも。

彼女はグッチのトートバッグからハンカチを取り出し、髪の手入れを軽く叩いた。脇の下がこれ程綺麗な女性を、俺は見たことなかった。人の家に上がるなら、もう少しまともな格好をしてくるべきだった。

「少しの時間なら」と俺は言った。

「すいません、無理言つて」と、優介ママは頭を下げた。

瀟洒な石段を上がり、背の高い玄関扉をくぐると、「今、冷たい物入れますからどうぞお掛けになつて」と、彼女はバッグをテーブルに放った。

通されたリビングは既に冷房が効いていて、程よく冷えていた。南向きの窓には蔓薔薇模様のレースのカーテンが引かれ、黒のレザースファや背の高い観葉植物、金縁のサイドボード、そして壁にはロイヤルコペンハーゲンのイヤープレートが順序良く並べられていた。

同い年の子供がいるとは思えないほど部屋の中は整然としていて、家のトーンもまるで現役を引退した七十代の資産家夫婦が好む部屋のようなだった。金持ちなんだ、と俺は直ぐに思った。

汗のかいた麦茶のグラスを勧めながら、彼女は俺の向かいに座った。「ご先祖の財産を食い潰してるだけですから。それより、暑くありません？」

大丈夫、と俺は手を振った。これだけ不景気でもお金はあるところにはあるのだ。

「女の子は可愛いですよね」と優介ママは羨ましそうに聞いた。

「嫌われてますけどね」

「そうですか？ 毎日楽しそうに手を繋いで歩いているじゃないですか」

「俺が仕方なく手をひかれてるんですよ」

そろそろ二人目は、と聞こうとして止めた。何気ない問いかけの

ようでありながら、それは非常に私的でデリケートな話だ。

次の子欲しいんですけどどういうわけかなかなかできなくて、と優介ママは俺の気持ちを察したように言った。俺は彼女から視線を落とし、頭を掻いた。

「鳴海さんの奥さん、テレビコマーシャル作ってらっしゃるんですよね？」と彼女は聞いた。「格好いいですねえ」

「そんなことないですよ。朝早いし夜も遅いし。子供にとつてそれがいいかどうか。ただ、自分が失業中だから、今は妻に頼るしかないんです。情けないけれど」

「でも、うらやましい。父親が育児、っていうか、家庭にいるのって。何だか時代の先端を行ってる夫婦って感じ」

「そんなんじゃないですよ。結果的にそうなってるだけです。それより森尾さんのご主人はどんな仕事を？」

「財務省の職員なんです」

聞かなければよかった、と俺は後悔した。惨めな気持ちになると分かっておきながら。それにしても、財務省なら倒産の心配なんて一生しなくて済む。

その時、優介ママの携帯電話が鳴った。ごめんなさい、と彼女は言っ、ぱたんと電話を閉じた。

「実家からでした。田舎から野菜が食べきれないほど届いたので、取りに来てくれって。鳴海さん、ちょっと持ってもらえますか？すぐ戻りますから」

「いや、それなら失礼を」

「本当、せっかくの機会ですし、お野菜も少し持つて行っていただきたいので。ご迷惑じゃなければ。実家、近所なんです。すぐ戻りますから」

俺の制止の言葉には耳も貸さず、優介ママはぱたと玄関から飛び出していった。車のエンジンをかける音、アクセルを踏み込む音、やがてそれは小さくなり、通りの坂道に消えて行った。

いくら同じ幼稚園のご近所とはいえ、無防備過ぎやしないか。全く近頃の若い母親は、という言葉を中心に飲み込んで、俺はグラスの氷を頼張った。

他人の家に一人でいるというのはどうも落ち着かなかった。俺はブランターの並んだ庭を望むリビングの窓際に立って、自分の住むアパートを見た。坂を挟んだ二階部分のキッチンのガラス窓が開けっ放しで、テーブルの上の調味料や子供のおもちゃ箱までもが見渡せた。カーテンをしていないと随分見えてしまうものだ。

部屋の中は静かだった。道を通る車も少なく、雑木林から聞こえる蝉の声だけが少年時代の記憶のように遠く鳴り響いていた。

どこからか品のいい花の匂いがした。匂いの元を確かめようと、俺はダイニングテーブルの周りをぐるりと回った。キッチンのシンクにはまだ朝食の残骸と汚れた器が積み上げられていた。匂いの元は、優介ママの香水かもしれない。脇の下の映像が、消しても消しても頭の中に甦っていた。

もし優介ママが俺の妻で、一緒にこの家に住んでいたら。それはあまりにも唐突で乱暴な妄想だった。アンパンマンのキャラクターシールが隙間なく貼られている冷蔵庫を開け中を点検した。それから封の開いた箱からマカダミアナッツを一つ取り出して口に放り込んだ。

戻ってしなければならぬ仕事をぼんやり復唱した。ゴミの収集車が来る前に、生ゴミを捨てなければならなかった。出がけに回してあった洗濯物を干し、妻や子供のブラウスにアイロンをかけ、銀行からお金を下ろして、通販で買ったパジャマの代金を振り込まなくてはならなかった。

そんな雑事と戯れていると、あつという間に「お迎え」の時間になってしまう。だから時間は有効に使わなければならない。でもこの調子では今日は無理そうだった。

優介ママが出かけてから、かれこれ一時間近くが過ぎていた。その間、プランターのミニトマトを眺めたり、ビデオやCDのライブラリーを眺めたり、もう一つチョコレートを食べたり、ソファの上に立ったり座ったりした。彼女の身に何かあったのかもしれない、と俺は思った。例えば、事故や何か。

電話が鳴った。ディスプレイには携帯電話の番号が表示されていた。優介ママだろうなとは思ったが、万が一彼女じゃなかったら（例えば旦那からとか）、何故自分が今ここにいいのかを説明しなければならぬ、そうなると思わぬ面倒などと躊躇している間に、ベルは鳴り止んだ。やれやれ。

俺は居間に散らかっているおもちゃを箱に仕舞った、というより放り込んだ。そして電子ピアノの電源を入れ、光の示す通り鍵盤を押した。それは何年か前に流行ったアニメ映画の曲だった。

それから、両手を大きく広げて仰向けになり天井を眺めた。手の甲が隅に畳まれていた洗濯物の山に触れた。それは綺麗に三列に並んでいた。一番奥が父親、真ん中が子供、手前が優介ママ。

俺は上半身を起こして、手前の洗濯物の中から真っ赤な下着を抜き出し、光の射す方向に翳してみた。それは向こうが透けて見えるシルク地で、フロント部分を飾る花の刺繍は素人目に見ても手の込んだものだだった。

見た目通りだ、しばらく俺はその柔らかい生地感触を確かめたあと、匂いを嗅ぎ、丁寧に折りたたんでポケットに仕舞った。

それから間もなく彼女が戻ってきた。
「たった十分停めてただけで駐車禁止ってどういうこと？ 信じられない」

優介ママは俺の顔を見るなり、既に氷の解けた麦茶を一息に飲

み込んだ。

「ああいうのって、誰かが通報するのよね、意地の悪い人。ごめんなさい、本当にお待たせしちゃって」

「いえ、事故かと思って心配してました。電話が一度鳴ったけど」

「あ、それ私です」

「そうかなと思ったんですが、違う人だったら困るので出ませんでした、すみません」と俺は正直に言った。

本当にごめんなさい、と優介ママは何度も頭を下げた。彼女の前髪とシャツの背中がぐつしよりと濡れていたが、彼女は何も気にしていないようだった。

「今日も外はめちゃくちゃ暑さですね。キップ切られて、もっと熱くなっちゃったけど」

意地悪な老醜はどこにでもいるのだ。

「鳴海さんが家事をするんですか？」

「はい。妻に食べさせてもらってますから」

「食事の支度も？」

「料理は昔から好きなんです」

「ちなみに今晚のメニューは？」

「ロールキャベツでも久しぶりにやってみようかな」

「うらやましいご主人さんだなあ」

優介ママは目を伏せて、うちの人は家事も育児も何も手伝ってはくれないから、と溜め息混じりに付け足した。

「いやいや、自分は暇なだけですから」

「少し手伝ってくれるだけでも助かるんですけどね。麦茶、入れ直します」

俺は時計をちらと見た。用事があるのでそろそろ、と柔らかい口調で言った。

「誘っておきながら逆に留守番までさせてしまって、本当にすみませんでした」

帰り際、優介ママはスーパーの袋を一つ俺に手渡した。「これ、うちだけじゃ食べきれないんで、皆さんで召し上がってください」
太くて、しっかり芯の通ったアスパラガス。茹で立てに塩だけで食べるの、私大好きなんです、と彼女は言った。俺はお礼を言っ
て今晚のメニューリストに「茹でアスパラ」を追加した。

「あ、鳴海さん」

階段を下りかけた俺を彼女は呼び止めた。俺の心臓は一度大きく鼓動した。ポケットの中にある彼女の下着をぎゅっと握り締めた。

微笑みながら、優介ママはやや首を傾げた。

「お尻、汚れてますよ」

3

「こばと幼稚園」は都内でも有数の園児数を抱える私立幼稚園だった。従って、「お迎え」の時間にもなると、少子化問題が他の国の出来事に思えるほど、自動車や自転車で来園する保護者たちでごった返した。

幸い、自宅から園までは坂を下っていくだけの近い距離だったの
で、車をこすられる心配も自転車の置き場に困ることもなかった。

ハナのクラスの下駄箱には、多くの人々で溢れていた。人波が去るまで、俺は一番低い鉄棒に腰掛けながら待っていた。

目の前を、優介ママが子供の手を引きながら横切っていったが、鉄棒の俺には全く気がついていないようだった。先程の汗に濡れたシャツではなく、今度はカラフルなタンクトップを重ね着していた。

彼女が視界から消え去るまで、俺はずっと彼女を目で追った。例の下着を履いてシャワールームから出てくる彼女の姿をイメージしていた。財務省の夫、というのがいまいちぴんときなかつた。

喧騒が徐々に遠のき、水を吸った土囊のような時間が俺の周りに流れた。何度も空想を上塗りしては消した。固く目を瞑り、瞼の裏に舞う小さな光の塵を目で追った。一八〇センチある自分の身長が半分くらいに縮んでしまったように思えた。

歩み寄る俺の姿を認めると、先生は「ハナちゃん、パパよ」と言っ
て腕の中のハナを床に下ろした。ハナは担任の脚にしがみついて、
なかなかこちらへこようとはしなかった。

「今日ハナちゃん、廊下で転んでしまつて」

先生はハナの顔を俺に見せようとしたが、ハナは嫌がつて先生の
太ももに顔を押し付けた。時間をかけた編み込みも形が崩れ、短い
髪がところどころで毛羽立っていた。額に青い痣ができているのが、
ちらと見えた。

「誰かに押されたつて言うんですが、誰か分らないんです。急に
背中を押されたつて」

「そうなの？ ハナ」

俺はハナの手を取りながら彼女の背中に向けて言つたが、ハナは
何も答えなかった。ハナの掌はしつとりと濡れていて熱かった。

「申し訳ありませんでした。私の注意不足で」

先生は大きく顔を歪めて、深く頭を下げた。園のオリジナルロゴ
がプリントされたトレーナーの袖から糸がほつれていた。

小便もろくにできない子供達を三十人も任せられているのだ。一
人一人の行動を管理するなんて物理的に不可能である。先生はハナ
を可愛がつてくれている。これ以上無理は言えない。

「ハナは運動神経がないんですよ。だから、普通に歩いていてもよ
く躓いて転ぶんです。腕の力がないから受身が取れなくて。さあハ
ナ、行くよ」

どうにか先生からハナを引き離すと、俺は小さな足に運動靴を被せた。ハナはうなだれたまま、俺とは目を合わそうとしなかった。それでも、長く泣き続けたであろうことは、瞼の腫れ具合から推測できた。普段は生意気で気丈に振舞っているが、意外につまらないことで延々泣いていることがある。一人っ子ゆえの特性なのかもしれない。

「帰ったら、いつものプリンあるから食べようよ」

「いない」と彼女は消え入りそうな声で答えた。

「じゃあ、アイスクリームは？」

「いない」

「無理に食べなくてもいいけどさ」

俺は諦めて「トトロの木」を仰いだ。木はクスの木だったが、本物の「トトロの木」になるには、まだ何十年もかかりそうだった。「先生にさようならは？」

先生はハナを思い切り抱きしめながら、ごめんねハナちゃん、と言って頭を撫でた。

「気にしないでください。転んで瘤ができるなんて当たり前のことなんだから」

いやいや歩くハナの手を無理にひっぱりながら園を後にした。先生は長い間ハナに手を振っていたが、ハナは何の応答もしなかった。髪の毛の生え際に無数の汗が光っていた。俺はポケットに手をつ込んだが、その感触はハンカチではなく、若くて淫靡な人妻の痕跡だった。鼓動が再び早まった。腰が砕けてよその垣根を崩さないよう、慎重に歩を進めなければならなかった。長い復路になりそうだな、俺は自分の額を毛深い腕で拭った。

妻が帰宅したのは、ちょうど十時を回った頃だった。クライアントとの調整がうまくいかなかったらしく、口を利くのはうんざりのようだったが、ハナの痛々しい顔を見ては、真っ赤に充血した目でブラウン管を睨みつけている俺に話しかけないわけにはいかなかった。

「ちょっと転んでぶつけたただだよ」

ただもくもくと色鉛筆を動かし続けるハナに代わって俺が答えた。ここで三番、四番打者のいずれかに一打出れば、お粗末な拙攻戦にようやく決着がつくはずだった。

「それにしても大きい痣じゃない。そんなに酷い転び方したの？」

ハナ

隣に座るや、ハナは鉛筆を放り投げて、まだスーツ姿の母親の膝に顔を埋めた。

「可愛そうに」

ハナの髪の毛を優しく撫でながら、妻は俺の方を見て言った。

「帰ってきてからちゃんと冷やしてくれた？ 真っ青じゃない。こんなの初めてだわ。ねえ、ハナ、どこで転んだの？」

ハナは何も答えずに指しやぶりを始めていた。これをする時は、そろそろ床に就く合図だった。つまみを食べる代わりに、俺は親指の爪を噛んでいた。それほど酔ってはいないんだというところをアピールするために、一度言葉を頭で暗唱してから、口の筋肉に神経を集中させた。

「先生だつてそんなに個人個人の動きまでフォローできないよ。でも、あの先生はよくやってくれてる」

「私が聞いているのはそういうことじゃなくて、どこで転んだのかってこと」と妻は声を一回り大きくして言った。

最近仕事がつまらなくていいのは分かっていた。感情を家に持ち込むなとまで言うつもりはなかったが、声を荒げるのだけは止めて欲しかった。気に食わないところや誤りがあるならその部分を指摘してくれば十分な訳で、大きな声や金切り声は事態をより混乱させ、不毛なストレスをお互いで溜め込むだけだ。

「ねえ、あなた、その癖いい加減止めなさい。ハナが真似するじゃない。『何でパパはいいの?』って言われるのよ?」と妻はさらに大きい声で言った。

「ささくれの皮を口で剥いてるだけだよ」

「理由はどうあれ、指を口に持つていくのだけは止めて」

俺は頭の疼きをビールでどうにかごまかしながら、ロールキャベツを火にかけた。それから、冷蔵庫に冷やしてあったアスパラを皿に盛りつけた。もう少し根の方は切るべきだった。固そうなところを選別して包丁を入れ、三角コーナーに捨てた。心臓が腰に移動したかのように、動作に合わせてじんじん疼いた。

「誰かに押されたみたいだよ」と俺は独り言のように言った。

「え、何? 今何か言った?」

ハナを一度抱き直しながら、妻は聞き返した。ハナは母親の懷の中で指を咥えたまま既に眠っていた。

「押されて転倒したって、先生が言ってた」

「そういうことは先に言ってくれないと駄目じゃない。それに、もつとハナのこと気にかけてあげてよ。こんなに酷い怪我してるのよ? 野球なんて見てる場合じゃないじゃない」

妻は細かい傷のたくさんついたタグ・ホイヤーの腕時計をはずして、テーブルに放り投げた。腕時計は、まだ交際している時に三か

月分のアルバイト代をはたいて買ってあげたものだった。

妻にはこれまでにいろいろなものあげた。妻はそのどれも好んで身につけ、長く愛用してくれた。妻のそういうところに俺は魅かれていた。今でも、十分妻のことは愛していた。あまり大きな声さえ出さなければ。

俺はテレビを消した。結局、三番、四番とも連続三振に終わり、両チームは果てしなき消耗戦に突入していった。

「ごめん。ハナ、寝かしてくる。布団、敷いてもらえる？」

「もう敷いてあるよ」と俺は言った。

朝食用の米をときながら、窓を少し開け、森尾家を眺めた。昼間、俺がいたリビングにはレースのカーテンがひかれていたが、時折、人影のようなものがいたりきたりしているのが見えた。至近距離から聞こえてくる虫の声が蒸し暑い夜にささやかな清涼を与えていた。

太陽光パネルの敷き詰められた屋根のすぐ近くに、とても強く光る星を見つけたが、何という名前の星か思い出せなかったので、後でネットで調べてみることにした。

夜空を眺めるのは、昔から好きだった。今、自分が見ている光が何万年も昔の光であるということや、どこかに地球と同じような星があつて、そこでも何らかの生命体が彼らなりの営みをおくっているのだと想像すると胸がときめいた。確か、居間の押し入れに双眼鏡が仕舞ってあつたはずだ。

俺はもう一度森尾家のリビングを確認してから窓を閉め、慎重に釜の水量を合わせた。

「例えば打ち所が悪くて頭の骨にひびが入るとか、そのせいで半身不随になるとか、そういう可能性が全くないとは言い切れないですよっ？」

布団の中でも、妻は話を続けた。ハナはぴいぴいと鼻を鳴らしながら、押入れにびったり寄り添うようにして眠っていた。

「前にも、転んで割り箸を喉に刺しちゃったとかいう事故があったじゃない。万が一、ハナにそんなことが起きたらって考えると、私怖くて。仕事中だって、ずっと心配なのよ」

妻の手が一瞬俺の手に触れたが、俺は反射的に手を引つ込めた。

「分かるよ。瘤を見ればそれは可哀想だけど、でも転ぶなんて日常のことじゃないか。それを恐れていたら、何もできなくなるよ。少し気にし過ぎだよ」

「自分で転んで怪我するのは仕方のないことだと思う。気がかりなのは『誰かに押された』ってことなの。ADHDの子がいるらしいの」

「ADHD？」

「うん」

エアコンのタイマーは既に切れており、部屋の冷氣は失われつつあった。俺は妻の布団の下に足を突っ込んだ。無性に煙草が吸いたくなっていた。

「その子、同じクラスみたいなのよ。乱暴で、先生も手を焼いているって。ねえ、あなた、何も知らないの？」

「知らないな」

「どうして毎日幼稚園送り迎えしているあなたが知らなくて、私が知ってるのよ」

「そんなこと言われても。先生からは何も聞いてない」

「先生がそんなこと言うわけないでしょ？ 『同じクラスに、ADHDの子がいます』なんて。ねえ、何か冷たいもの持ってきてくれない？」

「ごめん、煙草一本吸ってきてもいいかな」

布団を抜け出て、妻に冷たいお茶を手渡してから、俺は換気扇をつけて煙草を吸った。ハナが生まれてからは、キッチンが唯一の喫煙場所だった。シャツの首周りが汗で湿っていた。俺は一服一服を惜しむように吸いながら、妻の性格について考えた。

その注意深い、神経質な性格ゆえに現在の社会的な地位を獲得していることを考えると、あながち負の面ばかりでもないんだな、という結論だった。

そして星以外にもう一つ、ネットでの調べものができた。ADHD。

森尾家の居間の電気はまだ煌々としていた。人影はもう見えなかったが、光は柔らかく、余裕の気配を感じさせた。

時計は既に十二時を回っていた。俺は用を足してから寝室にもどると、妻は既にハナと同じ寝息を立てていた。間に合わなかったか。俺もタオルケットを腹に巻いて、団子虫のように体を丸め、明日の責務に備えることにした。

5

翌日、案の定というか、予測通りというか、ハナは「幼稚園に行きたくない」と言い出した。正に今、靴の紐を締め終わり、灼熱地獄への扉を開けようとしたちょうどその時だった。

「どうして？」

俺は玄関マットの上で俯いているハナに聞いた。

「どうしても」

両手を固く握り締めながら、喉の奥から絞り出すようにハナは言った。念のため、額と首に手を当てたが、特別熱いという感じでもなかった。

「どこか調子悪い？ 寒気とかする？ おなか痛い？」

ハナは何も答えなかった。ただ、俺の足元をしょげた顔で見つめているだけだった。

「何か言ってくれなきゃ分からないよ？ どうして行きたくないのかちゃんと説明してくれないと、お休みの電話もできないよ、ハナ」

逸る気持ちを抑え、俺は極力ゆつくりと、そして冷静に言った。

ハナの口はより力が籠められ堅く閉ざされた。我慢比べだな、ハナの方から切り出してくるまで、俺はいつまでも待った。

「こわい」

ハナは観念してぼつりと言った。

「怖い？」

「うん」

「何が？」

「おされたりするの」

ハナは怯えたように答えると、俺を一瞥し、再び視線を落とした。手抜きのおさげ髪が、ハナの赤く張りのある両頬をさりげなく隠していた。

「怖かったんだね」

昨晚の妻との会話を、俺は思い出していた。そして、妻が懸念するのも分からなくはない、と思った。怪我という物理的な損傷の他に、こうした精神的ダメージも蒙るのだ。

「でも」と俺は言った。「何もしてないのに、ハナのこといきなり押すなんて、酷い子だね」

「ちゅういしたの、ハナ。ちゅういしただけなのにね、きゅうにハナをてでおしたの」

「注意って？」

「ちゃんとみんなでつながっておそとへでようねってせんせいだったのに、ひとりでどんどんいっちゃったから、ハナ、ならばなきや

だめなんだよってちゅういしたらキックしてきて、それからおされて、ハナ、ころんだ」

俺は今にも泣き出しそうなハナの顔を両手で覆った。そんなことだろう、と思っていた。ハナは体力も筋力もないので、受身をとるのがすこぶる下手なのだ。転倒すれば、間違いなく体のどこかに傷を創る。ハイハイや掴まり立ちをしている頃に、あまりにも手を出し過ぎたことがいけなかったのかもしれない。

「それは、やっぱりその子が悪いね。ハナは何も悪くないよ。先生にちゃんと言ってあげるから。さ、行こう。ね？」

遅刻をするかしないかの瀬戸際までハナは渋っていたが、俺のいっになく熱心な説得によりやくハナも折れた。

しばらくご無沙汰のジムに行って汗を流したかった。絞れつつあった脇腹にも再び脂肪が付き始めていた。

先生に忠告するつもりはなかった。子供は子供の世界の中で、子供なりに解決方法を学ぶ。そのチャンスを奪ってはいけない。自分は子供に無関心ではない、と心に何度も言い聞かせた。

ハナを送り届けた後、ジムで一時間汗を流し、俺は押し入れの奥深くに眠っていた双眼鏡を探し当てるのに、また一頻り汗をかかなくてはならなかった。

通販で買った双眼鏡を父親から譲り受けたもので、とても天体観測をするには物足りず肉眼で見るとよりは少しまし、という程度のもだった。やたらに重い二十年以上も前の代物だが、全くの無傷で、これまた重い専用のハードケースに収められていた。「スポーツ観戦をする時の必需品だよ」と父は言っていたが、父がスポーツ観戦に行く姿を、俺は一度も見なかった。

とりあえずケースから出して、電線に止まっている雀を眺めた。ピントを合わせ、一杯まで拡大してみると、雀の腹の毛がもこもこ

と浮き上がって、一度ぶるつと震えるのが見えた。目はプラスチックでできたビーズ玉のようにきらきらと濡れていて瞬きをする度に、その黒さは深くなっていくようだった。

意外によく見えるもんだな、俺は双眼鏡を置いて、缶ビールを開けた。そして、夜になるのを心待ちにした。ベランダからは、南東の空が障害物もなく綺麗に見渡せた。めっきり星の数は減ってしまったが、それでも空気の澄んだ天気の良い日には、星座をきちんと確認できるくらいの光を見ることができた。

「ハナ、どうだった？」

妻は帰宅するなり聞いた。「ちゃんと、幼稚園行けた？」

「大丈夫だったよ」と俺は答えた。「食事中にうとうとしてたから、早目に寝かした」

行きたくない、と言い出した出来事については触れなかった。話がややこしくなるのが嫌だった。そのことについて、この時間に議論するのは疎ましかった。

「昨日かなりショック受けてたみたいだから、『行きたくない』なんて言い出したんじゃないかと思って」

さすがだなと、俺は感心した。一緒にいる時間は圧倒的に少ないのに、ハナのこと俺以上に良く分かっている。子供はいつまでも母親とは見えない臍の緒で繋がっているのだ。

「シャワー浴びてくる」

妻はスーツをハンガーにかけて、下着姿で浴室の戸を閉めた。彼女の背中に小さな赤い湿疹が出ているのが見えた。妻は強くストレスを感じると、湿疹がでたり、体中が痒くなった。

食卓をもう一度拭き直し、シチューを火にかけた。夏場の台所は地獄だった。居間のエアコンはあくまで「居間を冷やす」という役目以上の働きをすることはなかった。台所にもエアコンの取り付け

口はあつたが、そこは天井まである食器棚で塞がれていた。毎年、この時期だけの辛抱だから、と凍らせたタオルを首に巻きつけながら炊事をこなすほかなかった。

シチューが一煮立ちすると、俺は我慢できずに居間にいき、エアコンの拭き出し口を自分に向けた。シャツの首を広げて、背中にくさん冷気が入るようにした。

部屋冷え過ぎかな、俺は窓を開け、網戸を締めた。連なる山の稜線を真っ白な月の光がなぞるように照らしていた。林の中で、時間の感覚を失った蝉がここぞとばかり泣いていた。

今のこの心を保ったまま蝉になったらどうだろう、と俺は思った。昆虫は本能だけで生きているのだから、不安や悩みを感じないはずだ。仮にあつたとしても、それを「不安」や「悩み」と認識することはない。だとすると、今の心を保ったまま、というのは不可能か。それでも、今と違う環境に身を置いてみたいと、俺は本気で思った。蝉はやめよう。地上での生活が余りにも短か過ぎるから。

俺は双眼鏡を目に当て天を仰いだ。八月の南の空。木星は直ぐに見つけることができたが、アンタレスを見つけるのには時間がかかり、蠍座を形作る一つ一つの星を繋げていくのは不可能だった。空気が汚れている。空が明る過ぎる。

「何してるの？」と妻が聞いた。バスタオル一枚を体に巻いて。

「星を見てる」と俺は答えた。

「それ、どうしたの？」

「前からあつたでしょ。結婚した時、一度見せなかったかな」

「そうだった？」妻は思い出そうとする素振りもなくさらりと言った。

「どうしたのよ、急に」

「どうしたのって、ちよつと星が見たくなっただけだよ」

「そんな趣味あつたんだ」

「星は好きだよ。天体望遠鏡で日々観測するほどじゃないけれど」

「初めて聞いた」

「取り立てて言う程のことでもなかったから。それより早く服着てきなよ。蚊に刺されるよ」

「暑くてしょうがないのよ。髪乾かしてる間に、また汗かいちゃうんだから。あなたこそ、そんな格好で外いたら、蚊のいい餌食じゃない」

「そうだな」

俺は部屋に入り窓を閉めた。妻の言う通り、足の甲とふくらはぎの辺りに痒みを感じた。妻は洗面所でドライヤーのコンセントを差した。痒みは次第に酷くなり、掻き毟っている間に、赤い丘の面積はみるみる大きくなっていった。俺は舌打ちをしてから、懲りずに双眼鏡のレンズを覗いた。本当は、星なんてどうでもよかったのかもしれない。

「ちよつと、何？」と妻は言った。「やめてよ。恥ずかしい」

妻が本気で恥ずかしがっている姿を、俺は面白がった。もう、と言つて、妻はドライヤーを髪にあてながら洗面所の戸を閉めた。

俺は妻を見ている訳ではなかった。洗面所に貼られたカレンダーの小さい文字がどこまで見えるのかを試していただけだった。双眼鏡は、どんな小さなものでもピントさえ合わせれば良く見えた。ズームやピント以外にもいくつかのダイヤルが並んでいたが、それらの意味するものは俺には全く分からなかった。

俺は部屋を見回して、色々な物を眺めてみた。やかんの口から台所用洗剤、ガスの元栓や電子レンジなど、無目的にレンズを向けてピントを合わせた。食器棚のガラス戸はそろそろ掃除をしないと手垢が酷くて駄目だった。

それから、少しだけ開いているキッチンの窓から、外を眺めた。森尾家のリビングは、そこだけ四角くくり抜いたように幸福の明かりが灯っていた。レースのカーテンが開いていたので、今度は部屋の中がよく見渡せた。

ソファに誰かが座っているのが見え、テレビの画面がちらちらと切り替わっていた。座っているのが優介ママだということは、一度姿勢を正すために立ち上がった時に見えた後ろ髪の長さで分かった。そして、上半身には何も身につけていないということも。

妻はまだドライヤーをかけていた。俺の体は固くこわばった。双眼鏡から目を背けることができなくなっていた。血管の動きが分かるほど、激しく脈を打った。双眼鏡を握る掌にはべっとり汗をかいていた。

俺は固く目を瞑り、そしてゆっくりと瞼を開けた。レンズの先の白い肌は、時に左右に揺れ、時にグラスを口に運んだ。これまでに経験したことのない感情の昂ぶりを俺は感じた。

間もなく、ソファの反対側にトランクスの姿の役人が腰掛けた。この間、俺が腰掛けた辺りに。そして、役人が座るのを待っていたかのように、優介ママは彼の隣に座り直した。役人は優介ママの肩に手を回して、彼女のグラスを取り上げた。彼もまた、トランクス一枚だけで、上半身は裸だった。

ドライヤーの音が止んだ。暑い暑い、という声が奥で聞こえた。

俺は双眼鏡をテーブルに置いて、換気扇のスイッチを入れた。森尾家の私生活に通じる窓は閉めないでおいだ。

「今日、ハナは何をしてたって？」

妻はぐったりしながら洗面所から出てきて冷蔵庫を開けた。

「下着、だいぶ疲れてるね」

シンプルな作りのメッシュ入りのブラだが、ホックとカップの部分の生地は見るからに痩せ、綻んでいた。

「何年も使ってるからね」

ぶつきらばうにそう言つと、妻はグラスにビールを移し替えてごくごくと音を立てて喉に流し込んだ。「下着つて気に入ると、なかなか捨てられないのよ」

妻の肉体は、昔に比べれば当然衰えてきているはずなのだが、特に、尻から脚にかけてのラインは、とても彼女の年齢には見えないほどずつと締まっついていて肌にも張りがあった。それは俺にとってはちょっとした自慢だった。

「最近、またお腹出てきてるのよ、悲しいけど。ビール、一番良くないと分かつてる。でも、こんな暑さじゃ仕方ないじゃない」

グラスを揺らしながら、妻は首に巻いたタオルで口元を拭った。

「気違いじみてる暑さだからね」

自分も無性に喉が渴いていた。煙草を吸い終わったら一本開けようかと思つたが、最近少し飲み過ぎよ、と付け加えられた妻の一言で諦めた。

下着のまま、妻はいつまでもシンクの前に立っていた。彼女の背後の窓は大きく開いていた。入浴後においても、妻は必ずブラジャーを身につけた。少なくとも、俺の前ではそうだった。それは彼女のポリシーでもあった。緊張感がなくなるとすぐにたるんでくるから、と彼女は常々言っていた。

「こっちの椅子に座って飲みなよ」

「ちよつと風に当たりたいの」

「風なんて吹いてないよ。部屋、エアコン効いてるよ」

「効き過ぎて寒いわ。もっと節約してよ」

俺は森尾家のリビングからどこまで中が見渡せたかを思い出していた。こちらから見えるということは向こうからも見えるはず。この暑さでは皆裸になりたがるのも無理はない。俺は優介ママのことが気になって仕方がなかった。

「ねえ、ハナのことよ。今日は幼稚園で何をしてたって？ その病気の子の話はなかった？」

妻はしぶしぶいつもの食事場所に腰をかけた。

「今日はプールで水遊びしたみたいだよ。あと、塗り絵」

帰り際には必ず、先生が今日の様子を報告してくれるので、本人から聞かなくても大体の行動は理解できた。他の子とのトラブルやちょっとした怪我でも包み隠さず報告するというのが園の方針だった。

「たぶん、プールじゃほとんど泣いてたと思うよ。ちょっと顔に水ついたくらいで、この世の終わりのような泣き方するんだから」

俺はよく冷えた胡瓜を二本切って味噌を添えた。それとなく森尾家を見た。暗闇の中では、両眼で2・0という俺の視力をもってしても、既に電気が消えているということくらいしか判別することができなかった。

「森尾さんて、知ってる？」

俺は妻に聞いた。「向かいの家で、同じクラスの」

「もちろん知ってるわよ。それがどうしたの？」

胡瓜を齧りながら、妻は携帯を手の中で弄んでいた。

「仲良し？」

「うっん、名前を知ってるだけ。だって、私はそんなに何度も幼稚園に行ったことないのよ？ あなたの方がずっと親しいんじゃない？」

皮肉っぽく妻は言った。妙なことを聞いてしまった、と俺は後悔した。

「彼女がどうしたの？」

「いや、別に。昨日アスパラをもらったから。実家からのおすそわけ」

「そうなの？ それならそうと昨日のうちに言ってよ。お礼とお返

しなくちゃいけないじゃない」

「そうだね」

「相変わらず暢気な人。それにしても、またそんなの引っ張り出してきて、何なの？」

言いながらも、妻は双眼鏡を手にして興味深そうにいじくりまわした。

「でも天体観測って、普通は望遠鏡じゃない？ バードウォッチングはもつと小さいし。こういうタイプの双眼鏡って、どういう時に使うの？」

「単に古いだけだよ。今はもつと軽量でコンパクトだと思うよ」

「そんなの実家から持ってくるあなたもあなたね」

俺は妻の下着の毛羽立ちを見ていた。双眼鏡をケースに仕舞い、また汗が噴き出しそう、と言いながら、妻はシチューを皿に盛った。妻の表情はとても疲れているように見えた。動作の一つ一つが緩慢で、弱々しかった。

片親でもないのに、子供の寝顔しか見れない母親。俺は妻が不憫に思えてきた。やはり、子供にとって今の状況がベストだとは思えなかった。いい加減、現状に甘んじてジムなんて通ったり昼間から飲んだくれてばかりもいらなかった。

乾燥機の食器を棚に戻しながら、職業安定所の場所について思い出していた。去年、駅の南口に移転したはずだった。

「そろそろ、パジャマ着なよ」と俺は言った。

「そうね」と妻は忘れていたように答えた。「明日、ハナに言っていて。今度のお休み、みんなでジャスコ行こうねって」

俺は頷いた。ハナはおもちゃ売り場のテレビゲームをするのが何より好きだった。それから、魚を釣るメダルゲーム。

「何だか寂しい」

独り言のように、妻は言った。「そんなこと言ってもしょうがないけど」

「俺がいけないんだよ」

「あなたのせいじゃない。誰が悪いってことでもない。皆、世の中が悪い」

「いつまでもこんな景気が続くわけないと思うけど、でも何とかしないよね」

妻はそれについて何も答えず、黙々とシチューを掬った。きらきら光るキャラメル模様のカチューシャを見つめながら、俺は妻の见えないところで、こっそり爪を噛んだ。

6

次の日のハナは、問題なく幼稚園の敷居を跨いだ。先生はいつものように大きく両手を広げて、ハナを迎え入れた。

「おはよう、ハナちゃん。おでこ、だいぶ綺麗になったね。もう大丈夫だね」

「ご心配をおかけしました」と俺は頭を下げた。

「いいいえ、こちらこそ。こうして元気に園に来てくれるだけでも嬉しいです。ねえ、ハナちゃん、今日もまた先生と遊ぼうね」

ハナは満面の笑みで思い切り先生の体に飛びついた。そして、Tシャツの肩にごしごしと顔をこすりつけた。その行為はハナにとって、一番の愛情表現だった。

「毎日大変ですね」と俺は改めて敬意を込めて言った。

「子供、大好きですから。可愛くって仕方ないんです」

「自分の子じゃなくて、人の子に対しても均等に愛情を注げるというのは立派です」

「もちろん、皆さん、自分のお子さんが一番可愛いですよ。私は子供持ったことないけれど、もし自分にハナちゃんのような子供がいたらと思うと。それぞれの子のいいところを探してあげようと思え

ば、みんな個性あるし、みんなまるごと可愛いんです」

俺はあけすけで無制限な彼女の愛情を羨ましく思った。俺は親のくせに、彼女ほどの愛情をハナに注いでいると言える自信がなかった。毎日、ただ義務的にハナの身の回りの世話をしているだけのようないきがした。

髪の毛が結えるなんて何の自慢にもなりはしない。その証拠に、自分を見る時のハナの目、表情、口ぶりは、妻や先生と接している時とは全く違う。自分が男だからなのかなと思ったつもりもしたが、どうやらそれだけではないようだった。妻や先生にはある根本的な愛情が俺には欠けている。仕事をすれば、もう少しハナのことを思っ
てやれるようになるのかもしれない。

帰宅するなり、俺は居間のソファの上でごろんと横になった。ある物事について考えようとすると、考えようとする焦りばかりで、結局どれも中途半端な形で意識の奥深くに葬られた。体がずぶずぶソファにめりこんでいくような気がして、時々はっとして両手で支えた。

マットに絡みついた髪の毛。お菓子のかす。掃除機を何日かけていないだろう。それから、ハナの運動靴も真っ黒だ。あと、妻のブラウスにアイロンもかけないと。なすべきことの一つ一つがスライドショーのように浮かび、消えていった。

俺はけだるい体に鞭打って、冷蔵庫を漁った。缶ビールをグラスに開け、プロセスチーズを適当に掴んでテーブルに放った。意識と行動の間に大きなずれがあることを俺は理解していた。しかし喉の渇きは耐えがたかった。ビールを飲めば、更に汗を掻くことは分かっていたが、ビール以外の何も飲みたくはなかった。喉が痛くなるくらい、一息に液体を流し込んだ。

それから、俺は流し台に椅子を移動し、双眼鏡のストラップを首に引っ掛けて、両肘を台に乗せた。この体勢ならそれほど疲れるこ

とはない。邪魔な網戸を開け、先方のリビング全体が見渡せるように椅子の位置を調節してから、一度大きく深呼吸をした。

昨夜の光景が手に取るように頭に浮かんだ。優介ママの形のいい乳房が音もなく揺れていた。あの後、どういう形で物事が進んでいったのだろう。体が燃えるように熱かった。アルコールのせいなのか、若い人妻のせいなのか。

リビングは昨夜と同じく全てが開け放たれていた。連日続く猛暑の熱と光は、森尾家の屋根に据えられた太陽光発電の板一杯に降り注いだ。庭の低木や家庭菜園の苗は、互いのテリトリーを尊重しながら、それぞれの形と色を慎ましく主張していた。駐車場には、駐車禁止で捕まった小さなベンツと自転車。その前を、罰を与えられた囚人のように買い物用カートを押す例の老獺が、軽トラのクラクションに煽られながらスローモーションのように通り過ぎていった。

俺は優介ママが現れるのをじっと待った。自転車が置いてあるの、彼女が中にいることは間違いなかった。換気扇を回し、煙草をふかした。車さえ通らなければとても静かな場所だった。吸い込んだ時、灰が燃えていくちりちりという音が聞こえるくらい。

しかし優介ママは中々現れなかった。俺は二本目のビールを空けていた。昼間の酒は思ったより効いた。凍ったフェイスタオルを額に当て、上から押しつぶされた腹の肉の皮を摘んだ。

昨晩は遅かったので昼寝でもしているかもしれない。もうじき正午を差す掛け時計を見ながら、俺は溜め息をついた。彼女が眠っていると想像した瞬間、自身も小刻みな睡魔に襲われ始めた。大きなあくびをし、二つの空き缶をゴミ箱に捨てた。

やれやれ。仕事探し。

俺は自然に閉じられようとしていた。首周りと両脇の汗をフェイスタオルで拭き、シャツを交換した。そして俺はすぐ起きるつもりでソファに横になり、タオルケットを腹に巻いた。

首を真綿で締め付けられるような寝苦しさから目を覚ましたのは、既にお迎えの時間を三十分ほど過ぎた頃だった。

俺は慌てて寝癖のついた髪を水に濡らし、これから直ぐ迎えに行く旨の連絡を園にいれ、小便を済ませた。体の節々が痛く、動作にいつもの倍の時間がかかった。腫れ物のような臉を無理やりこじ開け、森尾家を見た。リビングがレースのカーテンとともに固く閉ざされ、自転車がなくなっていた。

園の下駄箱で優介を見かけると、俺は彼の若い母親を探したが辺りにはいないようだった。ハナは園庭の鉄棒にぶら下がったまま、俺が気がつくのをじっと待っていたようで、振り返るうともしない俺に、力一杯声をかけた。

「ねえ、パパー、みててー」

ハナの顔は紅潮していた。俺が側まで近寄っていくと、ハナは待っていたかのように呼吸を合わせて、お腹を中心にぐるっと前に倒れこんだ。長い髪の毛は馬の尻尾のように垂れ下がり、顔のそれぞれのパーツが重力で攣れていた。

「そんなことができるようになっただね、ハナ。絶対に手を離しちゃいけないよ」

「はなしてもだいじょうぶだよ、ほら」と言つて、ハナは腹だけで支えて見せた。

「危ないから、ハナ、ちゃんと棒を握りなさい」

「だいじょうぶなの」

体を支えようとする俺の手を払いながらハナは自力でもう半回転して着地した。「じぶんでできるんだから、さわっちゃだめ！」

「だって、落ちそうなんだもん」

「おちないってば。おちたことないもん」

「そうだけど。落ちたら、またママに怒られちゃうからさ」

俺はハナの真つ赤な掌についた汚れをハンカチで拭いた。「先生

にさよなら言いにくいよ」

見送りは、担任ではなく他のクラスの先生だった。担任は園長と打ち合わせ中とのことだった。俺はハナの保護者であるということ伝えた。

薄暗いリノリウムの廊下を、優介が大きく飛び跳ねながら行ったり来たりしていた。俺とハナに気がつく、優介は無表情のまましばらくじっと見つめていたが、何をするでも言うでもなく、再び暗がりの中に消えていった。

「ハナは、優介君とは仲良しなの？」と俺は聞いたが、ハナは何も答えずに、ただ首を振るだけだった。

「どうして？ 同じクラスなのに」

ハナの顔は、悪戯を咎められている時のように大きく歪み、今にも泣き出しそうだった。額の瘤はもうほとんど治っていた。脚は膝小僧を中心に、いろいろなところに細かい傷がついていた。

「いじめるから」と、ハナは口ごもりながら言った。「なにもしないのにいじめるんだもん」

「ハナが何もしてないのに、いじめるの？」

ハナはこくりと頷いた。

「それは、よくないね」

優介の姿は見当たらなかった。もちろん、優介ママも。

俺は、ジャスコにいかないか、とハナを誘った。ハナは二つ返事で「いく！」と俺の腕にしがみついた。ジャスコの何がそんなにハナを惹きつけるのか分からなかったが、ハナの機嫌をとるにはそれは殺し文句の一つだった。ラッピングの材料を買おうと思っていた妻へのプレゼント用に、ちよつとした小箱とリボンを。箱を開けた瞬間の妻の顔を想像し、俺はにやりと笑った。

その夜、ハナが眠ったことを確認した後、浴室の妻の着替えの上に、俺は自ら包装した小箱をこっそり置いた。

「なあに？ これ」

シャワーからあがったばかりの妻は、早速箱に気付き、扉越しに俺に聞いた。

「気に入るかどうか分からないけれど」

かさかさと、袋を開ける音だけが俺に聞こえた。そして、「まあ」と妻は頓狂な声を上げたきり、十秒ほど沈黙した。

「どうしたの、下着なんて。シルクじゃない、これ」

妻の言葉のイントネーションから、取り合えず不機嫌ではないことは分かった。

「履いてごらんよ」と俺は言った。

「ちよつと派手ね。恥ずかしい」

妻は下着を履いて浴室から出てきた。フロント部分のメッシュは思った以上に生地が薄く、模様の両端から柔らかそうな陰毛が不統一に押さえつけられていた。

「あまりじろじろ見ないでよ」と言って、妻は腰をくねらせた。久しぶりに妻を抱いてもいいかな、と俺は思ったが、妻は髪も乾かしていないし、食事もしていない。

「高かったんじゃない？ 何かあったの？」

「別に何も無いよ。そんなに高くもない」

妻とは長い付き合いだが、下着をプレゼントしたことはなかった。売り場で女性店員に相談しながら下着を物色する勇気など俺にはなかった。

「何だかあなたらしくない」と言って、妻はくすりと笑った。「誕生日でも、母の日でも、クリスマスでもないのに」

俺はただ、あの生地の瘦せたぼろぼろの下着をいつまでも履いている妻が不憫でならなかったただだった。

「おかしいかな？」

「おかしいとは言ってないわ。意外だなんて思っただけ」

そこそこの反応に、俺は満足していた。もう少し、下着に気を使ってくれてもいいのに、とずっと思っていた。

そして、今夜は赤い下着を身に付けた妻をと決意したはずが、布団に入るなり、俺は不覚にも眠ってしまった。十一時過ぎにワインのフルボトルを空けたのは失敗だった。

後頭部の酷い発汗で目が覚めた。枕の色が汗で広範囲に変色していた。頭の上の目覚まし時計を見た。午前1時。たっぷり熟睡した気がしたが、まだ床に入ってからいくらも経っていないかった。

隣に寝ていたはずの妻がいなかった。ハナは初めの体勢とは一八〇度逆さまになって、指を咥えて眠っていた。パジャマに手を当てるどぐっしより濡れていた。一日中エアコンつけてないともうだめかな、と俺は思った。

居間の電気は消えているようだった。トイレだろうか、俺は起き上がって自分も用足しに向かった。浴室の段差に脚をかけた瞬間、台所に丸くうずくまる大きな黒い塊に俺は肝を潰した。しかしよく見るとそれは人の形をしており、紛れもなく自分の妻だった。

「どうした？」と俺は聞いた。

「ねえ、あなた、ちょっと、見てよ」と妻は小声で言って、窓の外を指差した。森尾家のリビング。真っ白な電灯の下で、二つの肢体がこちらを向いて、立ったまま重なり合っているのが見えた。肉眼なので細部までは確認できないが、それが男女の裸体であり、真夏の夜空をロマンチックに眺めている光景でないことはすぐに分かつ

た。

「すごいわ」

双眼鏡を覗いたまま、妻は更に小さな声で囁いた。「こんなに家の中が丸見えだなんて。ねえ、私、他の人がそういうことするところ見るの、初めて。全く知らない人じゃないから、余計にドキドキしちゃって」

妻は明らかに興奮していた。普通に声に出して話せばいいのに、と俺は思った。

「それにしても、無防備過ぎじゃない？ わざと見せてるのかと思うくらい」

「ちよつと貸して」

昨日よりも、俺は落ち着いていた。妻がいるせいだろうな、と思った。

優介ママはリビングのガラス戸を両手で押さえたまま下を向いていた。下半身は何も身につけておらず、ホックの外れた赤いブラジャーだけをしていた。生地の変な匂いやデザインが、どこことなく妻にプレゼントしたものに似ていた。

男性の顔はあまりよく見えなかったが、日焼けした黒い筋肉質の両腕が優介ママの胸と下半身の間にうごめいていた。

優介ママがふつと顔を上げた瞬間、彼女と目が合った気がして、俺はすかさず双眼鏡を下ろし身をかがめた。

「どうしたの？」と妻が言った。

「目が合った」と俺は答えた。

「やだ、本当？」

「多分、気のせいだと思うけど」

我々は身をかがめ、しばらく無言で様子を窺った。日中吸収された熱が夜になって再び放出され、むさ苦しい空気で辺りは満たされ

ていた。規則的な妻の呼吸音と不規則な家具の軋み以外には何も聞こえなかった。とても静かな夜だった。

「こっちから見えてるということは、向こうからも見えるってことよね」と妻は言った。

「そういうことだね」と俺は答えた。

「試してみる?」

「何を?」

「何を、じゃないわよ。もちろん」

「もちろん?」

「鈍いのね。冗談。ねえ、もう寝ましょう。やっぱり、覗き行為は良くないわ」

「あれは絶対見せつけてるよ」

「どうかしてるわね、あの夫婦」

妻は小さめの氷を一つ頬張って、窓を閉めた。俺はもう少し見ていたいと思ったが、妻が潔く寝室に向かうのを見て諦めた。

レンズから覗いた優介ママの白い体と陰毛が目には焼きついて離れなかった。今頃になって、血液が体の中心部分に向かって急激に流れ込んでいくを感じた。親があんな行為をしていても、子供は何も知らずに眠っているのだろう。

それにしても、役人に似つかわしくない、逞しい肉体。

布団の妻は既に眠っていた。俺は妻の手を軽く握ってみたが、何の反応もなかった。真夏にもかかわらず、妻の手は乾燥していた。指の第二関節と付け根の部分の皮膚が硬くなっていて、少し切れているようだった。ステロイドも習慣になってきているせいか、以前ほどの効果がなくなっていた。

優介ママの情事の記憶に邪魔されながら、僅かな思考の隙間を縫って、俺は毎日のように折り込みチラシで入ってくる健康食品を思

い浮かべた。

有機ゲルマニウム。クロレラ。

妻の皮膚病を真剣に治してあげたかった。優介ママの肉体が綺麗であればあるほど、妻の体をいとおしく思った。

肉体の衰えを年のせいにはしたくなかった。それは自身の体も含めて。精力も筋力も経済力も、自分より年下の男に劣っているのだという事実を思うと歯痒く、辛かった。だからそのことについては、極力考えないようにした。あの家庭は決して平均値ではなく例外なのだと思い込ませた。

脳裏に駆け巡る感情のフラグメントをしらみつぶしに拾い上げては、手触りを確かめるまでもなく次々に捨てていった。自分の布団の上には、暑さを瞬間的にでも凌げる冷たい部分が少しも残されていなかった。

俺はエアコンのスイッチを入れ、タイマーを1時間後に切れるようセットした。それから、妻とハナのタオルケットを腹の部分だけかけ直し、寝顔を確認した。二人の寝顔は良く似ていた。とくに、目元と、口。

そして俺は足の裏を家具の扉に当て、枕を裏返した。時計を見ると、既に三時を回っていた。当分、ワインを飲むのはよそう、と心に誓った。

8

それからしばらく、妻の帰宅はずっと遅くなった。午前様になることもしばしばあった。

今日の出来事をどうしても話したいからと言って、ハナはぎりぎりまで我慢をするが、それも寝そべて絵本を一冊読んであげるまでの話だった。俺もそのまま朝を迎えてしまうこともあった。

時に、妻は酒の匂いを酷くさせて帰ってくることもあった。仮に妻から何の連絡がなくても、こちらから電話を入れたりメールをしたり、あるいは帰宅時にどこで誰と飲んでいたのかなどと野暮な詮索をするようなことはしなかった。

職業柄、一定の地位になれば多くのクライアントと付き合うのは当然のことだ。ましてや、妻は俺以上に酒が強いから、余計に声をかけられる機会も多いのだろう。

ただ俺が気になったのは、あの赤い下着以外にも、新しい下着が少しずつ増えていることだった。それも、これまでの妻とは少し異なった嗜好のものが。

そして、時々真夜中に小便で起きる度、妻は決まって森尾家を眺めていた。双眼鏡で見ている時もあれば、ただぼんやりとしている時もあった。俺が「どうした？」と聞いても、妻は「別に」と答えるだけだった。かなり参っているように俺には思えた。

森尾家のリビングはいつ見ても明かりが灯っていた。十時だろうが、夜中の三時だろうが。彼らは何度も部屋を横切り、食事をしたリ、テレビをつけたり、長時間いなくなったりした。

もちろん、セックスもまるで人に見せるのを楽しんでいるかのようになり、カーテンもせずリビングの明かりを灯したまま、ほとんど毎夜のように裸で抱き合っていた。

「そろそろ、寝た方がいいんじゃない？」とある日俺は言った。小便に行く時の妻の姿勢と小便が済んだ後の姿勢に何の変化もなかったから。

「そうだね」空間に文字を書くように、妻は言った。

「何か面白いことあった？」

「何も」と妻。「もうあの人たちも、寝たみたい」妻は大きくあくびをした。

「眠れないの？」

「うん」

妻は双眼鏡をテーブルに置き、背を逸らせながら眼球を強く指で押した。

「ハナ、すごく寂しがつてるよ」

「それは言わないでよ」

「最近、仕事きついの？」

「そういうポジションにいるから仕方ないのよ」

妻の両手がだらりと下に垂れた。同時に、森尾家のリビングから明かりが消えた。

「本格的に仕事探すからさ」と俺は言った。

「無理なくていいから。ハナが心配なのよ。二人が仕事してしまつたら」

終わりのなき経済不況。そして、我々の生活。

俺は財務省の仕事について考えた。国民や企業から吸い上げたお金の使い道を考えるという仕事について。

妻はほとんど意識を失っていた。あと数時間後には顔を洗い、髪を梳かし、口紅を塗って出かけなければならなかった。

「眠れる？」と俺は聞いた。

「たぶん。少し寝ないとね」と妻は言った。「起こしてくれる？」

「もちろん」

俺は妻の手を引いて、寝室に向かった。それは、まるで目の見えない老人を目的地まで導いているようだった。

ある日、一つの事件が起こった。

ハナと同じクラスの女の子が階段で突き飛ばされ転落した。幸い

大きな怪我はなかったが、彼女は膝の打撲が直ってからも、しばらくは登園できなかった。

突き飛ばしたのは優介だった。彼にはそれまでも前歴があるようで、この出来事をきっかけに、いろいろな親たちから彼への対応を巡って園の管理体制に不満が持ち上がった。

園長を含め、担任とクラスの親との非公式なミーティングが開催された。ある親は「今回のようなことがあると安心して園に預けられない」と訴え、ある親は「この場に今すぐその親を呼んで謝罪させろ」と憤り、またある親は「三十人の幼児たちを一人の若い教員でみるには無理がある」と園の拡大路線を批判した。彼はそういう病気だから完治するまで登園させるべきではない、とまで言う親もいた。

やがて、親が親なら子も子だ、といった優介ママへの個人攻撃が始まった。彼の粗暴さへの鬱憤は入園当初から保護者たちの中に蓄積されていたようだった。

結局、クラスに優介の行動をケアする補助員を一人配置する、ということでは話は落ち着いた。それから園長は最後に、彼は「ADHDではない」ことを強調した。

靴を履く時、ある母親が「あの年で再婚らしいわよ」と話しているのが聞こえた。

「子供は前の夫の子供だって。愛が足りないのよ」

「今の父親は夜の仕事の人らしいわ。暴力団なんて噂も」

「電話一本のお詫びもないって、非常識過ぎない？」

二人は自転車に跨って、俺の脇を通り過ぎていった。俺は、優介ママの体を抱いていた男の顔を思い浮かべていた。

引き締まった肉体。短く髪を刈り込んだ精悍な顔つき。なるほど、道理で役人らしくないわけだ。しかし俺には、毎夜優介ママを抱い

ている男は「夜の仕事をしている」夫ですらないように思えた。

優介ママが転居をしたのは、補助員がクラスに張り付くようになってからわずか一週間後のことだった。

俺は偶然、その大型トラックに荷物を詰め込んでいる業者の様子をアパートから見ていた。優介ママの姿を見つけることはできなかったが、小ささまざまな段ボール箱が、ユニフォームを着た男たちの手によって手際よく荷台に並べられていった。

作業は俺が食事をして昼寝をしている間に終了した。我々が穴の開くほど眺めていたリビングは固く雨戸で閉ざされていた。

引越しの理由について担任の先生は「旦那さんの仕事の都合のようです」と語った。他の母親たちも、莫大な借金があつて返せなくなったとか、子供の病気の治療のためとかいろいろな噂を立てたが、本当のところは誰も分からなかった。

優介ママがいなくなったことを妻に告げると、妻は少し寂しそうな顔をして「夜の楽しみが減っちゃったわ」と冗談ぽく言った。

森尾家の電気が消えていると、夜の八時でも真夜中に思えた。これで双眼鏡もしばらく使う機会はないだろう。俺はテーブルに出しっぱなしだった双眼鏡のレンズカバーをはめ、ハードケースに入れ、元あつた押し入れの所定の場所に仕舞った。

10

優介ママとその息子がいなくなつてからの我々の状況というのは、更に悪くなつていくように思えた。

優介がいなくなつた後でも、ハナは園に行くことを快く感じていないようだった。「頭が痛い」「お腹が痛い」と毎朝のように俺に訴えた。病気でもないのに休園することが多くなつていった。仮病だと分かつていても、その場にへたり込み、地獄のように泣き喚く我

が子を無理やり園に引きずっていく勇氣と根氣が自分にはなかった。ようやく園に預けたところで「調子悪くなった」と仮病を使われ、昼食前に迎えに行かなくてはならないケースもあった。

どうして園が嫌なのかを聞いても、ハナは「いやだから」と答えるだけだった。家にいたところで、絵本を読むでも絵を書いたりするでもなく、テレビやビデオを見ているだけだった。

最近では妻の言うことすらまともに聞こうとはしなかった。指しやぶりの頻度が増したことを咎められると、ハナは必ず矛先が俺に向くよう仕向けた。ハナをきっかけとした口論は、最終的に俺と妻の問題に擦り替えられた。

妻は、労働がよりハードになっているにもかかわらず、基本給と賞与がカットされた。ハナの通園を維持していくことさえ厳しい状態となった。当然のことながら、俺はジム通いを当面諦めざるを得なくなった。それから、ビールも。

体は寝たがっているのに、神経だけがぴりぴりしてると妻は言った。妻はしょっちゅう金縛りにあっていた。誰かに口を塞がれ呼吸ができない、という幻を見た。言葉の原型すら留めていない呻き声が耳元で聞こえ始めると、決まって俺は妻の体を起こし、頬を叩いた。そんな時の妻の体は蠟人形のように硬直し、酷い汗をかいていた。

金縛りに遭うのが怖くて寢床につけないという悪循環。寢床にいない時は大抵深夜の映画を観ているか、意味もなく台所に椅子を置いて、外を眺めていた。一度仕舞ったはずの双眼鏡は、再び食器棚の下に置かれていた。「天体観測」をする妻のために。

妻だけの力で、この家庭を維持していくことがそろそろ限界に近づいていることを俺は感じていた。

しかし、自分はどうと、ハナがそうした状況でもあり、働きにも出られずジムにも通えず、生活リズムはますます簡素化していた。

昨日も今日も全く同じ行為の繰り返しだった。ちょっと油断すると、食事すら同じメニューになりかねなかった。結婚祝いで妻の友人からもらったお手製のクッションを一つ駄目にした。何か思い切り拳を叩きつけるものが、俺には必要だった。

これから先、一体我が家はどうなってしまうのだろう。それは俺にも妻にも分からなかった。現在の日々の延長線上で未来を想像することはやりきれなかった。

昔よく見た夢のように、ふと優介ママと話した日のことを思い出す時があった。家の様子や、庭のプランターや、室内の調度品や、冷蔵庫の中身などが、やけに鮮明に思い出された。あんなに太いアスパラガスを食べられる機会は今二度とないかもしれない。

「今度、また一つ新しい仕事増えるの」と妻は発疹に薬を塗りながら独り言のように言った。

「また、病院に行ってもらってこなくちゃね、これ」

「薬だけなら、もらってきてあげようか？」

「診てもらわなければ駄目よ。ステロイドは怖いから」

ハナが「おしっこ」と言って起きてきた。妻はハナが用を足し終えると、布団まで再び寝かしつけに行った。目を開けているハナを見るのは久しぶり、と妻は言った。

朝方、あまりの寝苦しさと喉の渇きにうなされて目が覚めると、妻はリビングの椅子をベランダに移動させて、重い双眼鏡を両手で抱えていた。妻の上半身は裸だった。ぽつぽつと赤い染みの付いたシャツがくしゃくしゃに丸められて床に落ちていた。

「何してるの？」と俺は声を殺して彼女の肩越しに言った。

「星空を見てる」

振り返ることもなく、妻はゆっくり言った。外は既に白み始めて

いた。それは妻の声であつて、妻の声ではないような気がした。

妻の髪の毛は酷く乱れていた。何度も何度も掻き毟った幾筋もの指の跡が背中に残されていた。寝る前に塗ってやったステロイドの軟膏は見る影もなかった。

「ロイヤルコペンハーゲン」と妻は一言呟くと、双眼鏡を食卓に置き、大きな溜息を一つ吐いた。

ロイヤルコペンハーゲン。

目の前の家のリビングに並べられた夥しい数の皿の模様を、俺は思い出した。そして、後ろから妻の両肩にそつと手を掛けた。妻の体は生まれたての雛鳥のように震えていた。妻の身も心も、もう限界にきているのを、俺は感じた。

妻は静かに立ちあがって振り返り、パジャマを脱ぎ、そして赤い下着も脱いだ。

妻にプレゼントしたはずの赤いシルクの下着。しかしそれは全くと言っていいほど、妻には似合わない下着だった。やはり、妻はいつも履いている破れかけの下着の方が妻らしかった。こんな他人の下着を包装までして妻に渡したことを、俺は深く後悔した。妻の前で土下座して謝りたかった。それは、俺と過ごした時間全てへの謝罪だった。

妻は俺の腰に手をまわして胸元に顔を埋めた。全裸の妻を俺はしっかりと受け止めた。

「ねえ、あなたも脱いで」と妻は言った。

「今、ここで？」

時間は5時を過ぎていた。そろそろ妻は支度をしなくてはいいけない時間だった。

「あの人たちに、今度は見せつけてやるの」

それが森尾家を指すことは直ぐに分かった。森尾家は既に引越越しをしていて、こちら側に開かれていた大きな窓は、真っ黒な雨戸で閉ざされていた。

「じつと見てるのよ、あの人たち。分かる？」
「うん、分かるよ」

俺は妻を抱いたまま、しばらく動けずにいた。妻があまりにもきつく体に抱きついてくるので、服を脱ぎたくても脱げずにいた。妻の背中に回している指先には、悩ましい湿疹の凹凸がごろごろと触れた。

襖ががたと開いた。そこには園の制服に着替え終わったハナが立っていた。指しゃぶりをしながら、何も言わずにじつと我々を見ていた。

「まだ寝てなさい、早過ぎるよ」と俺は言った。

「ハナ、ようちえんにいく。いきたい」

ハナは俺の膝にしがみついて、顔を擦りつけた。ハナには気にも留めず、妻は俺の体に体重を寄せていた。

俺を中心に、今家族が一つになっている。それぞれが歪でそれぞれ壊れかけてはいるが、まだ再生不能とまでは言い切れない。俺は裸の妻と制服姿の娘を力一杯抱きしめた。妻は泣いていた。娘も泣いていた。俺も泣きたい気持ちを必死に堪えていた。仕切り直し。全ては俺の気持ち一つにかかっているのだ。

小さな白い蜘蛛が天井からぶら下がっていた。まもなく、妻の尖った肩に到達しそうな勢いだった。あと5センチ近づいたら、俺は手で握り潰してやろうと思っていた。

今の俺たちを馬鹿にする奴は、虫一匹すら許すことはできなかった。

<了>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9136u/>

湿疹 -ステロイドと赤い下着-

2011年7月20日08時45分発行